随想民芸運動論（29）－民芸の特性と縮小社会－

西堀寛厚

民芸（社会）、縮小社会・不便益（社会）、今回はこの三つの考え方の共通点について、民芸のもつ特質を中心に検討してみたいと思う。

（　）にいれて、“社会”という言葉を使ったのは、心も含めた我々の暮らし、延いては社会全体のあり方を考えてみたいからである。

拡大発展至上主義の現代社会にあっては縮小社会・不便益というような言葉を使うことさえ、お笑い種かも知れない。しかし、柳宗悦の民芸の思想はまさに縮小社会の思想なのである。“民衆”を母体にした質素な社会こそ人類に真の幸福をもたらすこと、そのことを柳宗悦は、“美”の概念を通して説いたのである。

柳宗悦の思想は、美の思想だと思われがちだが、その根底はむしろ、“社会“のあり方だったのではないかと思う。というのは、柳宗悦の民芸論は、“美”による社会改革を目指したジョン・ラスキンやウィリアム・モリスに学んだところが大きいからである。

とにかく、今の社会（資本主義社会）においては、柳の民芸思想は実現しない。それは縮小社会も不便益社会も同じである。それらが実現されるためには社会改革が必要なのである。 どういう社会かというと、それは「共同社会」ということになる。と言っても「共同社会」つまり“社会改革”を待っていたのではダメである。「縮小社会」の思想が世に広まれば、自然に社会は改革されることになるわけであるから、まずはこの思想を世に広めなければならない。「縮小社会」の思想が世に広まれば、それを実現する方法の一つとして「民芸」の考えがある。

※「民芸」はあくまでも「縮小社会」を実現する方法の“一つ”であって、他にも方法は沢山ある。私が今所属している「縮小社会研究会」はその思想を広めるだけでなく、その方法を研究する会でもある。

さて、それでは民芸の持つ特徴と縮小社会・不便益の共通点について、検討してみることにしたい。

民芸の特徴

まず、第一は民衆の日用品＝普通の暮らしをしている人々の普段使い（下手物）。次に、耐久性＝普段使いであるから丈夫で長持ちが必要条件。
この二つの要件を満たすための方法。

簡素＝形が単純で無駄な装飾がない。
多量＝日用品であるから量が必要。ただし不要な量産品ではない。
安価＝日用品であるから出来るかぎり値は安い方がよい。
地方性＝南国には南国の、北国には北国の暮らしがある。その地方の暮らしに合うように作られたもの。地産地消にもつながる。
伝統＝民芸は伝統産業の一分野である。
自然素材と手工＝民芸の生産手段は自然素材を使った手仕事である。
美＝以上のような民芸の特徴・要件が満たされれば、“美”は自然に生まれる。これを、“他力の美”ともいう。

以上、民芸の特徴は、どの一つをとっても「縮小社会」の世界である。
民衆、普段使い、丈夫で長持ち、形も装飾も簡素、使いやすい物を沢山つくるが機械製品のように無駄な物は作らない。地方性、伝統技術、自然素材、手仕事、そして美。
柳宗悦が民芸論を確立するにあたって、そのモデルとした民芸の品は、朝鮮の李朝時代と日本の江戸期の民衆の日用品であった。それはまだ機械時代に入る前の手仕事時代の産物である。
民芸運動の仲間の中には、ごく一部ではあるが、現代人の日用品のほとんどを占める機械製品も民芸として認めるべきだという人達がある。しかし、それを認めれば柳宗悦の理論にもとづく民芸運動の意義はなくなる。民芸は手仕事産業である。それを定理として、我々は認識しなければならない。
ヨーロッパでは、産業革命以後の急速な機械化によって手仕事産業は衰頽した。その衰頽した手仕事産業の復興をねらったのが、モリスらのアーツ・アンド・クラフツ連動であった。 日本では産業の機械化は明治以降になるが、やはりそれによって手仕事は衰頽したので、その復興を意図したのが、柳宗悦らの民芸運動であった。その始まりは大正末から昭和の初めである、ただ、この二つの社会改革運動のテーゼが手仕事による“美”の復活であったため、世の中全体を動かす革命（社会改革）には至らながった。
これに対して「縮小社会への道」は、現代の高度な機械技術による経済の拡大とそれにともなう資源の無駄遣いをなくし、人類を滅亡から救うという広大な思想である。今はまだ、これを理解する人は少ないが、このまま経済発展が続けば、二、三十年後にはいやでも「縮小社会」へ向かわざるを得なくなる。先進国での縮小はすでに始まっている。
どういう姿で“縮小”させるか。
その姿の一つが「民芸社会」である。ただこの場合、モリスや柳のように美にとらわれるのではなく、手仕事産業による社会改革を目指さなければならな

い。要は、“機械から手”への大きな発想の転換である。

　最後に、「不便益」について。
機械に比べれば、手仕事はまことに不便である。しかしそこには、自分の手で物を作るという楽しみがある。手による物作りは、機械に比べれば肉体的には厳しい面もあるが、それは手仕事の持つ益を考えれば大した問題ではない。
　地方の文化・伝統が守られること。地方での暮らしはたしかに不便であるが豊かな自然に囲まれて暮らすという益がある。それによって地方文化は生まれる。
　車や電車を使って遠いところまで働きに行かなくても、家族や集落の人達と共同作業が出来るということ。
　地産地消によって運送費などの無駄遣いをなくし物の値段を安く出来る益。
　そして何よりも、自然素材を使うので丈夫で長持ちのする美しい物が作れること。
　使う側からしても、機械製品に比べれば手作りのものが良いに決まっている。良いに決まっているが、今日の我々の暮らしを見れば、車やテレビをはじめとして、手では作られない物がほとんどである。それをどうしたらよいかということだが、よく考えてみると、昔の人達は車もテレビもないのにちゃんと暮らしていた。我々があってあたり前と思っている車もテレビも、そして機械製品のほとんどは、物より心を大切にする「不便益社会」においては、不要品なのではないだろうか。

（陶工、日本民芸協団本部常任理事）

日本工芸館機関紙『日本の民芸』2014年10月号より転載